

節分と立春

2025.2.3 校長 西谷 秀幸

昨日、2月2日は「節分」でした。この「節分」は「季節を分ける」と書きます。つまり、昨日はちょうど季節が変わる分かれ目だったのです。

そして、今日、2月3日は「立春」といいます。まだ寒い日が続いているけど、カレンダー上では、今日から「春」になるのです。

ちなみに、いつもの年だと、2月3日が「節分」で2月4日が「立春」なのですが、今年はちょっと特別な年で、「節分」も「立春」も1日早いのです。

さて、「立春」が春が始まる日ということは、夏が始まる日もあり、「立夏」といいます。5月5日、「こどもの日」から、カレンダーの上では夏になるのです。

また、秋が始まる日を「立秋」といいます。8月7日、まだ夏休みのめっちゃくちゃ暑い時期なのに、カレンダーの上では秋になり、冬が始まる日を「立冬」と言って、11月7日から冬になるのです

昔は、それらの日の前の日は、すべて「節分」でした。今は2月しか「節分」の行事をしません、実は「節分」は1年間に4回もあったのです。

では、なぜ2月だけ、「節分」の行事が残り、そして、豆をまくのでしょうか。

4つの季節のことを「春夏秋冬」といいますが、「夏秋冬春」とも「秋冬春夏」とも言いませんね。つまり、「春」は1年の始まりで、昔は、「立春」が1年の始まりの日、お正月みたいな日で、「節分」が1年の最後の日、大みそかのような日だったです。

昔の人は、病気はすべて鬼のしわざと考えていました。そして、豆には鬼を退治する効果があると言われていました。だから「1年の最後の日に悪いことをする鬼を退治して新しい年を迎え、1年間病気をしたり、悪いことが起きたりしないように…」という願いをこめて、「節分」の日に豆をまいたのです。

皆さんは、昨日の「節分」の日に豆まきをして、家や自分の心の中からも悪い鬼を退治したでしょうか。そして、豆まきをしたあとは、数え年といって、今年の1月～12月までに皆さんがなる年の数だけ豆を食べたでしょうか。数え年は、多くの人が今の年齢に1を足します。

ちなみに、東京では豆をまきますが、北海道では豆の代わりに落花生をまくのだそうです。一度巻いた豆を拾って食べるのは嫌だな…という人も、落花生なら、皮をむくから、安心して食べられますね…。また、うぐいす豆を食べることもあるそうですよ。

最近、「節分」の日に「恵方巻き」を食べるようにもなりましたが、皆さんの家ではどうだったでしょうか。「恵方」とは歳徳神（とくとくじん）という神様がいて、その年で一番良いとされる方角のことです。ですから、「恵方巻き」は、その年に良いと言われる方向（恵方）を向いて、願い事をしながら、太巻きを一本丸ごと食べるのです。

ちなみに、今年の「恵方」、一番良い方角は「西南西」です。「西南西」の方角というのは、皆さんの教室から見る「西光院」の方向です。

校長先生は、昨日の「節分」の日に、夜御飯で恵方巻きを食べたあと、豆まきをして飲み込めないくらいたくさん豆を食べて、今年1年の幸せを願いました。皆さんはどうでしたか。

これで朝会のお話を終わります。

(裏面に「先生方へ」があります)

〈先生方へ〉

先週は、校内研究全体会、新1年生保護者会など、ありがとうございました。

さて、今日は「節分と立春」の話をしました。私は、季節の行事について、毎年、繰り返し話していく必要があると思っています。各学級でも、節分や立春をはじめ、前回の「大寒」など、主な「二十四節気」や様々な記念日などについて、ぜひ子供たちに教えていただければと思います。

早いもので、すでに2月です。1月は「行く」、2月は「逃げる」、3月は「去る」といわれますが、残り授業日数も38日（卒業式を含め39日）です。「困ったときは、お互いさま。うまくいったときはお世話さま。」残り2か月間、いそがしい日々が続きますが、よろしくお祈りします。

【資料①】 節分の由来

- 「節分」とは、季節の変わり目を意味している。昔は「せち分かれ」と言って、立春・立夏・立秋・立冬の季節の始まりの日の前日を節分と呼んでいた。しかし、現在では冬から春になる立春の前日だけが節分として残った。
- 立春は1年の始まりと考えられていて、立春の1日前の節分は大みそかにあたる。悪いものを追い出して、素晴らしい春を迎えるために、春の節分だけが行事として残ったと言われている。
- 季節の変わり目には鬼が出ると言われていて、節分に豆をまいて鬼を追い払うのは室町時代から続いているが、なぜ豆をまくのかについては諸説がある。

豆をまくようになった諸説

- ①昔から米や豆には、邪気を払う力があるとされている。
豆の持つ邪気払いの力で、鬼を追い払うために、豆をまくようになった。
- ②昔、鞍馬山の近くの鬼が村人たちを困らせていた。
その時に鬼を追い払うのに豆を使ったことから、豆をまくようになった。
- ③鬼が暴れている時に、神様のお告げで豆を鬼の目に投げたら、鬼を退治することに成功した。
【魔(鬼)の目⇒魔目⇒まめ】【まめ⇒魔滅⇒魔を滅する】に通じると考えられるようになった。
※豆まきの豆は必ず炒った豆を使う。【豆＝魔目】を炒ることで鬼をやっつける意味があり、語呂合わせ的に考えて【炒る＝射る】にも通じるからである。
※拾い忘れた豆から芽が出ることが縁起が悪いとされているため、芽が出ないように、生ではなく炒るようになった。
※最近の節分用の豆は最初から炒ってあるが、炒った豆を「福豆」という。
※数え年の数だけ豆を食べると、病気になるはず健康でいられると、言われている。

【資料②】 「恵方巻き」の由来

「恵方巻き」は、節分に食べる太い巻ずしで、その年の吉をもたらす方角（恵方）に向かい、黙って願い事をしながら1本を丸かじりする。巻ずしを切らずに丸ごと食べるのは、縁をきらないという縁起をかついだものである。江戸時代から明治時代にかけての大阪の花街で節分をお祝いしたり、商売繁盛を祈ったりしたのに始まったといわれており、商人や芸子たちが節分に芸遊びをしながら商売繁盛を祈り、食べたようである。名前も「恵方巻き」という名前ではなく、「丸かぶり寿司」や「太巻き寿司」と呼ばれることが多く、七福にちなんで7つの具を入れて巻くのが基本になった。1970年代半ばに大阪海苔問屋協同組合が寿司関係の団体と連携し、節分と関連付けて太巻きの販売促進活動を行ったことが普及のきっかけとなり、1977年（昭和52）頃から関西圏を中心に広まった。セブンイレブンが1989年（平成元年）に広島県で「丸かぶり寿司 恵方巻」と名付けて太巻きを売り出し、その後、1995年（平成7年）に関西、1998年（平成10年）に全国発売を展開すると「恵方巻き」が一気に全国に広まった。今では、コンビニのみでなく、デパートやスーパーでも見られる食品になった。

【資料③】 今年の節分は2月2日、なぜズレる？

節分は、毎年2月3日のイメージがあるが、今年は2月2日になる。実は、2021年も今年と同じ2月2日が節分だったが、そのときは節分が2日になるのが1897年以来124年ぶりということで話題になった。そもそも「節分」とは四季を分ける節目のことで、本来は季節の始まりである立春、立夏、立秋、立冬の「前日」を指す言葉だった。ただ、このうち春の始まりを表す「立春の前日」だけが「節分の日」として残った。この立春の日が、ここ数年は2月4日だったが、今年は1日早まるために節分も2月2日になる。

それではなぜ、今年は立春の日が2月3日になったのだろうか。国立天文台によると、立春や夏至、冬至は暦の「二十四節気」といわれていて、太陽と地球の位置関係で決まる。こうした暦は国立天文台が決めていて、毎年2月に官報で翌年の分を発表しているのだが、地球が太陽を1周する時間は、365日ぴったりではなく、暦の上での1年が365日なのに対し、地球が太陽の周りを1周する時間は365.2422日となっているため、地球が1年かけて1周してもまだ0.2422日（＝約6時間）分、足りないのである。そのため、毎年少しずつ地球の位置がずれることになり、「立春」といった二十四節気の時刻も毎年、約6時間ずつ遅くなっている。

太陽の位置は4年で24時間ほどズレるので、うるう年として2月29日を作って解消している。ところが、うるう年を作ると逆に4年で約45分、400年で3日ほど増やしすぎてしまうため、うるう年を400年で3回減らしており、100で割れる年はうるう年にせず、400で割れる年はうるうのままにしている。来年から2028年までは節分の日が2月3日に戻るが、2029年、2033年、2037年のように、4年ごとに節分は2月2日になるようだ。